

松岡会長のご逝去

本会会長松岡雲峰（英雄）先生は平成九年二月十五日午前二時頃、身体の不調を訴えられ、市内の病院に入院されました。そして小康を保っていました。が、午後一時頃病状が急変し、手当ての甲斐もなく午後二時二分に急逝されました（享年八十二才）。二月十六日に通夜、二月十八日に近親者にて密葬が行われ、告別式は二月十九日正午から午後一時半まで高知市本町の高野寺において仏式によりしめやかに執り行われ、多くの会葬者の列が続きました（喪主洋一氏は東京在住、住友商事株式会社監査役）

四十年間「筆の友」主宰者としてのご功績に深く感謝すると共にご冥福をお祈りします。

筆の友書道会

松岡雲峰（英雄）先生 正四位勲三等瑞宝章 受章

去る二月十五日逝去されました雲峰先生（高知大学名誉教授・筆の友書道会会長・書道芸術院顧問・毎日書道会審査会員）は、永年の教育および書道芸術向上発展に尽された功績により、正四位勲三等瑞宝章を受章されました。

新会長に大野祥雲（定男）氏

筆の友書道会臨時総会を二月二十七日の二時半から三翠園ホテルにおいて開催し、松岡会長のご逝去に伴う後任の会長に大野祥雲氏を選任しました。氏は高知大学教育学部教授兼附属中学校長、高知県展参与、無鑑査、毎日書道会審査会員、書道芸術院理事審査会員の要職にあります。

追悼 松岡雲峰先生

本会会長で県書壇をリードしてこられた松岡雲峰先生が永眠されて、早くも三か月になります。昭和五十年春、先生から引き継いだ研究室で、師の悲報を受けたときは、我が耳を疑い茫然自失。早速お宅に伺いましたが、いつものお姿はなく戸惑うばかりでした。

先生は昨年十二月十九日、ご自身が生み育てた月刊誌「筆の友」の創刊四十周年を祝い、多数のご来賓、役員をお迎えし、盛大な祝賀の宴を開催されました。その席で「筆の友」のこれまでの道程と今後について力強くお話になり、その健在ぶりをお示しになったばかりでした。二か月後、永久の別れになろうとは……。先生ご自身も今ごろは筆山の花むしろにお座りになって、まさかと思われているのではないのでしょうか。それとも「人生ってこんなもんですよ」とおっしゃってるのかもしれませんが。

先生は明治四十四年高岡郡越知町横島に生誕。教師を目指して高知師範学校へ進学。ここで川谷横雲先生との出会いがあり、ひたすら書の道を歩み続けられることになりました。昭和六年師範第一部を卒業され、本川、相川、佐川の各小学校へ奉職。だが先生の目標は旧制の中学校、高等女学校、師範学校教員の認定試験でした。この最難関の文検習字科を目指し、登校中も、休み時間も、食事中も寸暇を惜しんで勉強されたと、たまに話されていました。

昭和十年文検合格。同十一年大分県女子師範学校教諭兼大分県立第二高等女学校教諭。同十九年高知師範学校助教授。同二十六年高知大学助教授。同四十一年教授。同五十年四月定年により退官され、名誉教授の称号が授与されました。

在任中は、専攻の書道を通じて教育・研究に専念され書道史、楷行草書、仮名および書写を担当されました。指導を受けた卒業生は県下はもとより広く教育界で活躍中であります。また、高知県展、各地の市展、書道芸術院展

などの審査も枚挙にいとまがありません。

書作におかれましては、自分の心情を飾らず素直に表現することが大切だと主張、唐様を経（たていと）に和様を緯（よこいと）とした独特の書風で数々の作品を発表されました。昭和五十一年一月大学退官記念として書作展を開催。同二十一年から同五十一年までの作品五十七点を展示されました。これらの作品は「松岡雲峰作品集」として編集されておりますが、一作一作が澄みきった清い線であり、気品あふれる高雅な作品となつて輝いています。こうした幾多の業績は高く評価され、昭和五十八年高知県文化賞受賞。この度は正四位勲三等瑞宝章を受章されました。

思いおこせば、先生との出会いは三十六年前、高知大の書道教室でした。以来高知大、筆の友、県展、毎日展、書道芸術院など、どれをとりましても恩の深い先生です。でも、先生は決して強制的なご指導はされず、背後から見守るタイプの方でした。それをいいことにすべての面で、師のご期待にお応えできなかった点が多々あり申し訳なく思っております。

今や教育者として、書家として、人間としてこの上ない恩師を失いましたが、雲峰先生の遺されました業績はいつまでも光明となって、私たちの進むべき道を照らして下さることでしょう。私たちもその光りを絶やさない努力をしなければなりません。そして与えられた仕事に精進することが、先生の大恩に報いる道であろうかと思えます。

雲峰先生、幽明相隔てはいたしました。どうかこれからも私どもを見守り、お導きくださいますようお願いいたします。

合掌 大野 定男